

診療ガイドラインにおける引用文献の特徴

Features of References in Clinical Practice Guidelines

学籍番号：201621625

氏名：長岡 優

Yuu NAGAOKA

診療ガイドラインは、「診療上の重要度の高い医療行為について、エビデンスのシステマティックレビューとその総体評価、益と害のバランスなどを考量して、患者と医療者の意思決定を支援するために最適と考えられる推奨を提示する文書」（日本医療機能評価機構）である。日本においては、Evidence-based medicine (EBM) 推進のための一つの手段として、1996年から診療ガイドラインの普及が推奨されてきた。

本研究は、今後の診療ガイドラインの作成方法やあり方について検討するための基礎研究として、診療ガイドラインにおける引用文献の特徴を探ることを目的とした。

日本の診療ガイドラインのうち、3回以上改訂している医師向けのものから、改訂のタイミングの近い『糖尿病診療ガイドライン』（2004年版、2007年版、2010年版、2013年版、2016年版）と『卵巣がん治療ガイドライン』（2004年版、2007年版、2010年版、2015年版）の2つを対象とした。各診療ガイドラインについて、1) 引用文献の発行年の分布および診療ガイドラインの出版年から引用文献の発行年を引いた引用年齢の分布、2) 改訂の際の引用文献の継続・追加・削除、3) 引用文献の研究デザイン（メタアナリシス、ランダム化比較試験など）の分布、の3つの視点で版ごとの比較・分析を行った。

主な特徴として以下が明らかとなった。(1) 定説化されている事柄にも引用文献をつけるため、医学分野の教科書と比較して引用年齢が高くなる傾向にある。その一方で、新しいエビデンスを取り入れる意識が高まってきており、近年の改版では改版前のものと比べて引用年齢が低くなることもある。(2) 初期の診療ガイドラインの改版においては、前の版に存在していた引用文献をそのまま引き継ぎ、新しい文献を追加する傾向にあったが、『診療ガイドライン作成の手引き』の出版・改訂を受けて、エビデンスを評価した上で、新しい文献を追加するだけでなく古い文献を削除し、引用文献の入れ替えを行うように変化している。(3) 引用文献の研究デザインは、医学論文全体の中でもエビデンスレベルの高いものを選択する傾向にある。

本研究で判明した特徴を把握することにより、診療ガイドラインを作成する際における文献の選定、特に図書館員による文献検索の一助となることを期待したい。

研究指導教員：緑川 信之

副研究指導教員：芳鐘 冬樹